社会委員会通信

№ 42　2011.9.11

発行：横浜港南台教会 社会委員会
〒234-0054
横浜市港南区港南台 7-8-29
Tel：045-833-5323　Fax：045-833-6616

2011 年の平和聖日は、誠実で謙虚なお人柄が印象に残った東海林勤先生のお話でした。

福島原子力発電所の事故が私たちに投げかけた多くの問題。隠されていた多くのウソ。豊かな文明や便利な生活の代償として引き受けさせられる不安と危険。人間の傲慢さが生み出すさまざまな貪り。人間が富に支配され、モノと化していく世界。「こんな事故になるまでお前は今まで一体何をしていたのか」と、先生はご自分の罪を懺悔されました。

今回の事故は、私たち日本人が自ら作った核の脅威の下に曝され、未来の命にまで及ぶ大きな不安と危険を生み出してしまうことになりました。チェルノブイリやスリーマイルの事故から私たちは何を学んできたのでしょう。原発に安全神話などはないのです。

命は神様の賜物。神様は私たちを愛され、私たち人間は生きるために必要なものすべてを周りの自然から与えられてきました。けれども私たちは、神様が「良し」とされた命あふれる世界を、自分たちの物質的豊かさのために利用し、環境を破壊し、また欲望を膨らませ続けてきました。人は自分たちの欲望が作り出した怪物に滅ぼされていくのではないでしょうか。

電気は魅力的なものです。文明の発展には必要なものですが、私たちは今、価値観の転換を求められています。モノから命へ。神様の創造物として、周りの生命体と共に生かしてもらう、命あふれる豊かさを祈り求めたいと切に思いました。

参加者は 47 名（男性 15 名、女性 32 名）でした。参加者の皆様、ありがとうございました。

（社会委員長：Ｙ.Ｏ）

地球生態系 対 原発 ―キリスト者の使命―

高麗博物館理事：東海林 勤

◆幼児を避難させる

午前の礼拝説教で申したように、私は福島第一原発の大事故の映像を見て心底言葉にもならない衝撃を受け、ことの重大さを直感して、一刻も早く自分の孫たち―１歳半と３歳半―を福島からなるべく遠いところに避難させなければと、焦りました。ほぼ 20 年間、私は NCCJ（日本キリスト教協議会、以下単に NCC と記す）の平和・核問題委員会と、原子力行政を問いなおす宗教者の会(以下「宗教者の会」と記す。仏教の住職が主で、キリスト教の牧師たちも参加している）の活動を通して、原発が他のエネルギー源と異なって莫大な核分裂生成物、つまり「死の灰」を引き起こし、その量は日本の原発全体で既に広島原爆の数十万倍に達することや、電力会社が大小さまざまの事故隠しやデータ改ざんを繰り返してきたこと、政府、電力会社、魂を売った学者や広告料に買収されたマスコミが一体となって「安全神話」を作り上げ、市民を洗脳してきたこと、などを知っていました。そのために大事故が起きれば、政府発表に頼

らず、自分で素早く判断して避難しなければならないと考えていました。そのため、私は孫の避難を図ったのです。ところが、両親は仕事のため、すぐには東京を離れられない。私は連れ合いに祖父母の私たちが孫を連れ出そうと提案したけれど、連れ合いはキリスト教婦人矯風会の女性シェルターの責任者だから寮生とスタッフを置いて自分だけ東京を離れることはできないという。議論しているうちに旅立ったのは 16 日でした。これは後で知ったことですが、14, 15 日に東京も放射能雲に襲われた後でした。事実を後出しする政府には腹が立ちました。

◆創世記物語における赦す神

しかし、何よりも重苦しく心に懸ったことは、自分が恐怖と思い煩いによって行動したことです。私は数年前に、大阪教区の核問題特別委員会主催の研修会で創世記の神話に基づいて講演し、神が祝福と喜びをもって創造した世界を決して見捨てることはないと語りました。神は楽園エデンに命の木と善悪の知識の木を生えさせ、アダムに善悪の知識の木からは取って食べるな、食べれば死ぬと言われますが、アダムは「女」と共に「神のようになろう」と思い、取って食べた。すると彼らは裸である自分を隠した。つまり、互いに自分を閉ざしたのです。ことのよしあしを自分で決めることによって、相手と競い、闘争し、自然と人をそのための手段として用い、覇権主義、または独り勝ちを追求する生き方です。苦しい仕事と空しい終わり。これが覇権主義の生活です。現代の巨大軍事・経済構造、とくにその象徴である原爆と原発は、このような覇権主義の不幸を表しています。

２人はまた神に対しても自分を隠しました。しかし、神は２人を呼び出します。つまりあくまで２人をご自身の祝福の中に、信頼関係の中に置こうとされます。そこで、神は罰として楽園からの追放とその後の苦しい生活を告げるのですが、２人の命を惜しみます。

アダムは女にエバ、すなわち「いのち」と名付けました。彼女が「すべて命ある者の母」となったからだと告げられています。神は２人が苦しい生活に耐えられるように、ご自身が祝福をもって創造された動物を犠牲にして、２人に皮の衣を着せました。神はあくまで人間を神の愛と祝福のうちに生きるように、神を信頼し人間同士も信頼し合って平和のうちに生きるようにと求め、そのためご自身が人間の罪過を赦すという痛みを負われるのです。神の創造の愛は、始めから罪の贖いを含んでいたと言えるでしょう。

このことは、カインの保護、洪水の後の「虹の契約」からヨセフ物語に至るまで、豊かに示されています。そして新約聖書では、神の贖罪愛は御子イエス・キリストの十字架の死に極まって現されます。

私は原発大事故の衝撃に対し、恐怖と思い煩いによらず、創造者なる神の愛と祝福に信頼して行動すべきだったのです。そのため、私は大事故の恐ろしい映像を見るたびに、「自分は今まで何をしていたのだろう」と自問するようになり、やがてその問いが「お前は今まで何をしていたのか」という、私に問いかける問いに変わってきました。自分の孫の安全が問われて原発が初めて自分の問題になってきた。それまでの関わりはすべて人ごとであったという想いに、殆ど打ちのめされる気がしました。

しかし、神はその私を赦して新しく本気で関わるように促して下さいました。

◆神の赦しは人を介して

赦しは人を介して起こりました。「宗教者の会」が３月末日に京都で、原発被災地の子どもたちの避難を支援するために緊急共同世話人会を開いたとき、そこで私は先に述べた大阪教区核問題特別委員会の、山崎喜美子委員長にお会いしたので、孫の避難について２～３の質問をしたところ、数日後にお連れ合いの山崎知行医師（同委員会委員、チェルノブイリの子どもたち救援に尽くしてこられた）から電話による丁寧な、心のこもったご

指導を受けました。その中で、山崎先生は、「幼いお孫さんを福島からできるだけ遠ざけようとされたのは正解でした」と明言してくださった。私はあっ、そうだと思いました。孫の場合は５泊６日だけど、少しでも汚染されていない土地に行けば、被災していても健康回復に役立つし、予防にもなるということだったのだ。とにかく、危急の場合に最も身近の子どもを守ることは最初の課題だし、そこから発展してもっと厳しい状況に置かれた子どもやその家族に少しでも役立つことをして、関わりを広げていくことができるのだ、と思い至りました。

私は自分本位だと思って恥じながら質問したのに、「いや、それは正解だ」と。つまり、危急の場合、まず自分の身の周りで、自分が助けることが出来る人間を助けなければならない。それから自分の身の危険についても、まず自分がそれをどう防ぐかということを考えなければならない。つまり、「生きろ」ということですね、問題は。その上で自分だけではなくて、もっとひどい状況にいる人たちに対して何をなすべきか。こういうふうに発展していくわけです。皆さんも同じ状況になれば、きっとそうなるでしょう。

さらに礼拝の中で話したような経験を個々におさらいすれば、NCC 平和・核問題委員会ではカトリック正義と平和協議会、「宗教者の会」と３者共催で田中三彦さんを講師に招き、第一回『脱原発キリスト者フォーラム』を４月下旬にキリスト教会館で開きました。急な呼びかけにもかかわらず、百数十人も集まりました。田中さんは科学技術的な検証を重ねて、東電と政府の大津波原因説を明確に論破し、津波以前の地震動によって配管や機器の類が破損して制御が利かなくなっていたことが論証されました。このことは地震の多い日本では原発は保持できないことの論拠になるので、政府も東電もまったく認めようとしないことです。田中さんの講演は、私たちには運動の立脚点として重要な意味を持つものでした。

フォーラムが終わってから私は田中先生に挨拶をしたとき、まだ心に引っかかっていたこと、つまり３・１１までは原発は私にとって人ごとであったということを、思わず話してしまいました。すると、田中さんはいつもの穏やかな語りかけで、こう答えられました。「それは誰にとっても同じことではないでしょうか。私だってチェルノブイリの放射能が日本にも降ってきたと知って、ようやく原発が自分のこととなったんですよ」。私はこの答えからも、赦しと励ましを与えられる思いでした。神は不見識な私をなお赦し、田中さんのようにしっかり課題に取り組むよう促してくださる。田中さんご自身が、著書『原発はなぜ危険か』（岩波新書）の中で、ソ連から送られてきたばかりのビデオから写真集を作るために何度も食い入るように見入って、悲しむ人々の姿を涙なしに見られなかったと述べておられます。既にそれ以前に、社会的にも思想的にも格闘しておられたのだが、ビデオ・写真とはいえ、チェルノブイリの人間と出会ったことは、かつて最も有能な原子炉圧力容器の設計者であった方の、決定的な回心であったと言えるのではないか。

◆新しい生き方へ

私も及ばずながら、今は新しい命と生活（両方とも LIFE）に生きるように召されていると思います。それは原発について言えば、GDP 追求とは相いれないものです。それは少し硬い言葉で言えば、個人の尊厳、あるいは自分自身であること、または自由。これは日常大切なんだけれど、危機というものに対処する時には非常に重要なことです。その点が日本では意識が薄いのではないでしょうか？これは、非常に根本的な問題です。つまり、人間の生き方の問題です。原発の問題というのは、単に科学技術の問題ではないし、このまま市民があいまいで嘘とごまかしに満ちた発表や情報に振り回されていたら、自分自身と人々に対して何の主体性も持てないし、少数特権層が自分の利益のために利用する国家

に向かって対峙することは、とてもじゃないけどできないでしょう。

人間がどう尊いのか、私という者がどう尊いのか。それから、同じように隣人はどう尊いのか。隣人に対する責任とはどういうものか。こういうところがはっきりしていないと、科学技術の知識だけでは日本は救われませんね。そういう点が曖昧だから、善意で被災者を懸命に支援したりしても、それがとかく原発推進に役立つかたちにされてしまう。推進派はもう巧妙なものですよ。「大いにやってください、がんばれ日本」と。そして天皇・皇后と皇族が総動員で先頭に立ち、みんなが一致してやっているんだからあまり文句を言わない方がいいよ、ということになる。すると、その空気の中で、実際に原発で今苦労して働いている労働者は、犠牲になっていくわけです。それこそ、もう文字通り被曝のための労働を強いられていくわけですよ。

ちょっと新聞のことに触れますと、僕は東京新聞を読んでいます。前は朝日新聞を取っていたのですが、朝日があまりにもどっちつかずで、問題を避け、焦点をぼかすから、腹が立ってきて、私は読めなくなってしまった。良い発言も中にはあるけれど、全体としては当たり障りのないことを言うから、気持ちが悪くなって、東京新聞に変えたのです。そこのところを朝日新聞みたいに曖昧にしてはいけない。朝日に限らず、大新聞はみんな東電からすごい広告料をもらっているんです。３・１１が起きた時に、東電の会長が新聞社のトップを大勢連れて、中国へ遊びに行っていたでしょう。それで「実力者」の会長が緊急の会議に出られず、原発事故発生時の一番重要な時期に処置を遅らせ、惨事が拡大した。そういうことがバレて、一時大騒ぎになりましたね。でも、市民はみんな気前よく忘れたのか、東電によるマスコミ支配は変わりなく続いているわけです。新聞は両論併記でバランスをとりつづける。核と人間は本来共存できないのだという基本の基はぼかしたまま、当たり障りのない議論を並べる。だから読者は原発問題を本気で考えない。それこそ原発は人ごとなのです。いや、人ごとでは済まされない。購読者は少なくとも購読することによってこのあいまいさを、ひいては原発推進を支えていることになるからです、キチット批判的に読むのでない限り。

東京新聞は、国民がこの日本で生きたいのなら脱原発しかないと考えているようです。それを偏った主張だと見る人もいるでしょう。しかし脱原発は、そもそも人為的な核分裂が莫大な量の「死の灰」を引き起こすという事実、この国では地震が再び原発大事故を起こさせ得るという科学的な想定に基づいた提言なのであって、これを偏っていると見る方が欺瞞に毒されているのではないか。しかも推進派は原発がこの国の経済水準維持のために必要だと言うが、それはみんなウソで、一部の支配層の目茶苦茶な暴利追求のためであることが、今度の事故で明らかになったのです。そういうことが東京新聞では逐一報道されています。

原発を推進すると、電源３法などで国費から手厚く支援され、しかもその財産は丸々電力会社のものになる。はやく言えば、財産はまるまる東電がいただき。だから、いくらでも増設することができた。その上、その財産の額に応じて国費からますます支援が出る。それでも大事故や予想外の出費が生じれば、支払限度額以上のものは国費から出る、そういう法律になっているし、今度の手直しでも基本は変わりません。変わったのは、老朽原発でもなんでも、発電していれば補助金は出るが、停止していれば何も出ないよという形にしたことぐらいです。安全志向からますます離れていきます。恐ろしいことです。

国費からというのは、私たちの税金からということです。私たちは国や自治体が国民や住民の平和な幸せな生活を図るように、税金を納めているのです。それを、市民の生命を危険にさらしてまで自分たちの利益・権益を守ろう、増やそうと考えている人たちが使うのです。私たちはこの不正に対してもっと怒

らなければならない。そのうち大地震が起こったら、それでおしまいです。仮に起きなくても、漠然と情報を眺めていたら、そのうち足をすくわれるでしょう。

私は礼拝のときと同様、もう一度「神の国と神の義を求めよ」と言いたい。そういうところを、つまり人間の責任性とか隣人愛とか、それから自分自身の大切さ、命の大切さ、そしてその点については、隣人に対してフルに自分は責任がありますという姿勢。これを教会なら持てるはずです。聖書の福音に立てば、そうなるはずです。

そういう意味で、われわれ自身が「義とは何か」「正義とは何か」ということを明らかにしていかなければなりませんね。こう言うと、また説教みたいになってしまいますが。

◆ＧＤＰかＬＩＦＥか――命を選べ

ご存じかもしれませんが、僕は NPO 法人の高麗博物館、これは 20 年ぐらい前から、大久保の職安通りとも言う韓国通りのビルの７階で小さくやっていますけれど、そこのことで、改めてこれも勉強しなければならない、一からやり直しだな、と思うようなこともありまして、在日朝鮮人の生活と歴史をもっと具体的に学ぼうと、心を入れ替えて、そちらの方に夢中だったのです。２年ぐらいかな。それで、原発の方はおろそかになってしまった。そこへダーンと来たものですからね、本当に辛い思いをしました。

ところが、これはやはり正義の問題として繋がるのですね。そのまま繋がるのです。つまり、原発の中で最も厳しい作業をさせられる人、これは協力会社の社員なんて言っていますけれども、下請けの、孫請けのひ孫請けが多いのです。この人たちは何重にも労賃を取られて、わずかしか手に入らない場合もある。しかも放射線に対する労災みたいなものはないんです。全然ない。大きな事故があって、今回みたいに死者が出たりしますと、公になったものですから、出す場合もある。ただし電力会社の社員であれば、です。手配師に集められたりすると、平たく言えば、放り出されて闇に葬られてしまうということが、以前からあります。

放射線従事者中央登録センターという組織がありますが、これも電力会社がお金を出して作ったものです。ところが、そこに被曝労働者として登録されている人たちは、もう 40 万人を超えています。広島・長崎の犠牲者よりも多くなりました。それなのに、この大事故が起こる前までは、労災を認められたケースはたった６人。40 万人で６人ですよ。ベンゼンとかアスベストとか、がんになる危険性のあるもの、これはちゃんと補償の対象になることが決まっています。ところが、放射能被害については、健康手帳というものもないし、訴えたくても方法がないんです。

作業員はみな放射線管理手帳を渡され、そこに作業内容や健康状態が記入されることになっているけれど、これは作業員のためでなく会社が個々人をどこまで使えるか管理するためだから、作業員は自分で手帳を保持することができない。登録センターに保管されても本人はこれを見ることができない。その会社がいい加減で、手帳を管理しないでどこかに放ってしまうようなケースもたくさんあるんです。ですから、「登録されているだけで」40 万人と言わなければならない。漏れる人たちがたくさんいる。そして、一番ひどいことをされるのは、在日コリアンであり、琉球の人たちであり、アイヌの人たち、それから被差別部落の人たち、近頃ではアジア、南米からの移住労働者も。そういう人たちが、作業中、ものすごく暑い所で、脱いではいけない防護服を脱いでしまう。耐えられない作業をして、放射能を浴びて、しかもそれが補償されない。事後の検診もされない。

彼らは、今の日本の一番底辺の人たちです。さらに言いますと、これは、実は土建業の人使いの構造です。戦後、土木建築は日本の近代化を急げというので、ものすごい勢いでインフラを造った。それを造ったのは、みんなすぐれた職人です。たとえば、土を掘る職人

とか、トラクターを動かす職人とか、そういう人たちが駆り出されて、ものすごく危険な作業をした。危険な所、例えばダム建設なんかどんなに危険があるか。発破をかけたら、それと一緒に死んでしまうというようなことが、たくさんあった。そう、戦後よりも戦時中の方がもっとひどかった。

そういうふうに人集めをして、仕事がなくなったらその人たちは雇わない、駆り出さない。つまり出稼ぎ、日雇いです。一生懸命働くその人たちのお陰でインフラができた。それで日本の近代工業化ができた。鉄道であれ、大きな埠頭であれ、橋だとか大きい建物が建った。それは、全部その人たちのお陰です。ところが、その人たちは、ろくに補償もされないで、けがをすればそれでおしまい、ということがほとんどでした。

つまり、人は人間として遇されない。モノ扱いです。利益を生み出すモノなんです。そういう非人間性があって、それが原発で極限に達した。なぜなら、どうしてもそういう人がいないと、原発は動かせないから。原発１基が１年間稼動すれば、そこから出てくる放射性物質が広島原爆の 80 万倍。それほどものすごい放射性物質が出るんです。そういうものを造ったのです。今、こうしてしゃべっている間にも、原発が動いている限り、どんどん放射性物質が出ているわけなんです。それが積み重なっている。そして、それは「処理」と言うけれども、処理しようがない。再処理工場で処理と言うけれど、処理しようがないんです。そして、もっと恐ろしいものを更に出すということになります。そういうことに目をつぶらない限り、原発は動かせない。これは根本的に正義に、人倫に反することです。

日本 YWCA の関屋綾子さんをご存じですか？ 世界平和アピール七人委員会の委員や「原爆の図丸木美術館」（埼玉県東松山市）の館長も務められた方ですが、日本 YWCA の会長を長くされました。その方が、「すべての核エネルギーに反対」ということを YWCA の一つのモットーに掲げた。それをスローガンに掲げたのです。そして取り組み出した。

これは国際的な平和ということを、その集団の中で良心的な人たちが、いかに原発も原爆に等しく殺人的であるかということを知ったからです。そういう一つの働きがずっとありまして、関屋綾子先生が NCC（日本キリスト教協議会）に平和・核問題委員会を作りました。

そういう関係で考えますと、われわれは反米とか自由市場経済反対だとか・・・私は賛成しませんね。こういうものを生み出すから。しかし、ソ連の原発だってすごいじゃないか、と。そうなんですよね。ですから、原発覇権主義と言うべきです。つまり、一人勝ちですよ。突き詰めると、これは一人勝ち主義です。原発をたくさん持って、ものすごいエネルギーを作って、ものすごい生産をして、ものすごく新しい社会を創ってどんどん生産、どんどん消費、それをやって覇権を競い、そして地球をめちゃくちゃにしていく。

神が祝福して創ったこの地球という生命体を、神の手から奪うようなかたちで用いる。自分の利益のために用いる。こういうことは神に対する反逆ではないか、ということを言わなければならない。これは、東ならよいとか、西の、たとえば原水禁と原水協の違い、そういうことで別れたんでしょう。今は「東側の原爆はいいんだ」みたいなことを言う人は、いくら原水協でもいませんけれど。それは繋がらない。社会党と共産党は繋がらないですね。

そんな問題じゃない。これは、神の義に対するわれわれの責任。そして、今やそれが世界にその害悪が及んでいるのであるから、世界に対するわれわれの責任。つまり、人類に対する責任。そして将来に対する責任。未来世代に対する責任。非常に倫理的に聞こえますが、最も深い意味において信仰的な問題。それがこの原発問題だと私は思うわけです。

これは「原子力行政を問い直す宗教者の会」会報ですけれど、ここに載っている顔は、六ヶ所村の前々村長だった寺下力三郎さんです。この方は反原発の闘士だった。闘士と言っても、とてもゆったりした穏やかな方で、非常に魅力的な人です。この方が戦前に朝鮮に行って朝鮮人を使うかたちで朝鮮窒素に関係しました。国策の大企業が植民地の人たちに犠牲を強いるわけですが、寺下さんはそのような日本人のやり方に我慢が出来なくなった。会社を辞めて、もともと日本の農村の出だったから、蚕を飼う方法を教える仕事を見つけて働いた。ところが終戦になり、日本に帰ってきた所が青森の六ヶ所村だったのです。そこは夏でも冷たいやませの吹く、農業には適さない所だったので、苦労して開墾して畑にして生活したり牛を飼ったりしていた。そこは殆ど着のみ着のままで外地から帰ってきた人が多かったのです。

そこに日本の政府と電力会社が目を付けて、つまり、そこはもとは公有地で荒地ですから、あまり人がいない。それから、みんなが喜んで住んでいるとは言えない所だ。と、いうことで目を付けたんです。ですから、会社や政府にとっては既にそこに住んでいる人は邪魔者なんです。言い換えれば、人間と見ていないわけで、補償を求めるような邪魔者なんです。

そこで、その人たちを丸め込むためにお金を注いで原発賛成派に変え、そして、そこを立ち退かせる。そうすると、住民にはお金がたくさん出ます。そのお金で何をするか。そもそも農地から追われた農民は何ができますか？ 彼らは雇ってもらえるものと思ったけれど、そんなことにはならない。

そういう人たちは無用だからどこかへ行けと言われても、行くところがない。仕方がないから、貰った金で近くに家を建てる。お金をたくさん貰ったから大きな家を建ててしまう。ところが、自分の息子たちは、そんな所にいたって将来がないからみんないなくなる。それで爺さん婆さん、あるいは爺さんだけがポツンと残る。大きな家がずらーっと並んで、そこに老人がポツンといる。これも荒廃ですね。生きていく道がないんです。そして、しまいにそれらの家は人の手に渡ってしまう。そういう悲劇が六ヶ所村にはあります。

そんなふうにして土地を取り上げられたのはあんまりじゃないかというのが、寺下さんの思いでした。彼は反対の声を上げました。その頃は、まだ村長になれたんです。ところが次々に、強制的に、それからお金の力でほかの人たちは黙らされて、原発推進派が村長になった。この人は残念ながらクリスチャンなんです。その人が属する教会には、とても忠実な信徒もいて、寺下さんと一緒に反原発運動を続け、牛を飼い、農業をやり続けてきた方もいます。非常に誠実なクリスチャンです。こういう人もいますから、キリスト教がダメだということにはならないわけです。

さて、寺下さんが言っている「平和」という考え方。政府や役人、電力会社はこの地に「国策」だ、国家的事業だ、と称して乗り込んでくる。すると住民は「国策ならしょうがないだろう」となる。住民は国策、国策と言われてやられてきたから。黙ってしまうんです。国策で開拓難民にされ、巨大開発を押し付けられ、ついに再処理工場など核燃料サイクル基地ができたし、それからむつ小川原開発が進む。

それに対して寺下村長さんは極めて平易に、平和、正義ということを考えた。彼はあくまで村民の安全と幸福を守ろうとした。これが村長の原点だった。それで、風格からして住民の闘いの原点を示すような人だった。彼は、「平和とは当たり前の人間たちが、支配も被支配もなく、それぞれ自分らしく生きることだ」と考えた。これが大事です。人はモノじゃない。まして邪魔者ではない。邪魔者なんて一人もいない。「それぞれ自分らしく生きている。互いに仲良く、安全に当たり前の生活を送れることだ」。これが平和だと言うんです。これ、素晴らしい定義じゃないですか。

ところが、国家と大資本は、国策や経済成

長の名において、そういう生活を脅かす。その平和を破壊する。今言った平和は、そこには全くない。むしろ恐怖があるだけ。それに対しては､はっきり抵抗しなければならない。そういう意味で彼は泰然として、しかし、鋭く反原発の闘士として闘ったのです。

落選してしまったけれど、こういう人の思想を継いで岩田雅一さん（彼は私が一時教師をしていた農村伝道神学校の卒業生です）が八戸に就任して、反原発の闘士になった。あそこは核のゴミ捨て場みたいになってしまった。ものすごく大きい鋼鉄製の、直径が 3m ぐらいある丸い筒、そういうものにいっぱい高レベル廃棄物を積んで、それを処分する。ガラスと鋼鉄で囲ってしまったものがフランスと英国から帰ってくる、それがみんな六ヶ所村に集められる。そして、それを水の中に漬けておくんです。何百年か経てば、それを取り出して処理する。あるいは、それを再処理工場で使って処理する。いくら再処理工場で化学処理をしたって、放射能が 1 ミリだって消えるわけではない。そういう物質なんです。消えるわけはないんですけれども、そういう所に行って、その入港を阻止するという先頭に立って、警察にごぼう抜きされたりして、岩田雅一さんは頑張ってきました。

それから、教団の現在奥羽教区の副議長になっている白戸清さん。彼は以前、茅ヶ崎にいました。彼も地味な方ですけれど、反対運動をずっとやっています。その人が今度副議長になった｡クリスチャンは､まだ力がなく、数が少ない。なかなか大きな力になりませんが、非常に大事な視点を持っているんです。それは神の国と神の義です。犠牲にされていく人たちを決して見過ごしてはならない。それはあなたの責任ですよ、と。こういう視点です。時間になりましたので、ひとまず私の話を終わります。

参　考　文　献

◆**『原発のウソ』**　小出裕章著　扶桑社新書　777 円

◆**『隠される原子力・核の真実―原子力の専門家が原発に反対するわけ』**　小出裕章著　創史社　1,470 円

◆**『放射能汚染の現実を超えて』**　小出裕章著　河出書房新社　1,365 円

◆**『原発はいらない』**　小出裕章著　幻冬舎ルネッサンス新書　880 円

◆**『原発事故はなぜくりかえすのか』**　高木仁三郎著　岩波新書　735 円

◆**『原子力神話からの解放―日本を滅ぼす九つの呪縛』**　高木仁三郎著　講談社プラスアルファ文庫　800 円

社会委員会からのお知らせ

★寿町支援と海員宣教支援のための物品を下記の期間に受け付けます｡皆さまのご理解とご協力をお願いいたします。

11 月 27 日（日）～12 月 18 日（日）

★次回の社会委員会学習会は 2012 年２月５日（日）に開催します。原発に関するＤＶＤ鑑賞を予定しています。

以上２件とも詳細は後日、週報または掲示板にてお知らせいたします。